

さいたま市立浦和博物館館報

あかんさす

VOL. 50

通号 第 119 号

「あかんさす」とは、浦和博物館2階バルコニー柱頭に見られる植物の葉の彫刻で、当館を象徴するキーワードの一つとなっているものです。

1 浦和博物館リニューアルオープンについて

浦和博物館は建物の中規模修繕工事に伴い、1年間の休館を経て、令和3年7月1日にリニューアルオープンしました。この建物は旧埼玉県師範学校（通称鳳翔閣）の中央部外観を復元したもので、往時を彷彿とさせる白亜色の美しい姿が蘇りました。

今回の工事に伴い、展示ケースの配置を壁面側に寄せるといった工夫をしたことで、1階展示室内中央部に広いスペースを生み出し、各種のイベントや講演会を実施できるようにしました。また、展示の内容も見直し、1階には原始・古代から近現代までの通史展示を、2階には見沼通船堀や浦和画家など、浦和地域にゆかりのある資料を並べたトピック展示を行いました。

1階の展示室のスペースを活用して、7月1日にはバイオリンとキーボードによるコンサートを開催し、リニューアルオープンに花を添えていただきました。7月2日から4日までの3日間は、「さいたまの宿場」をテーマとした講演会を開催し、多くのお客様にお越しいただきました。

また、リニューアルした建物は、良好な景観形成の核となる建造物であると評価され、令和4年2月10日にさいたま市景観重要建造物に指定されました。

浦和博物館では引き続き日本古来の材料である和紙や漆などを用いた工芸講座「うらはく工芸くらぶ」等、各種講座を充実させてまいります。皆様には、ぜひ足をお運びいただき、四季折々に様々な表情をみせる浦和博物館を楽しんでいただければ幸いです。



ゆとりのできた展示室内



装い新たな外観



2 ^{む か さ ゆ う ざ え も ん} 武笠祐左衛門・^{ぎ ん す け} 銀介親子の隠された生涯

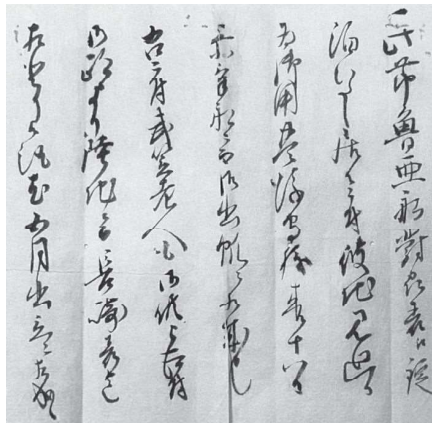
(1) 武笠祐左衛門・銀介親子の出自

これまであかんさす115号や116号をはじめ、数度、幕末期まで三室村（現さいたま市緑区）の名主役を務めた武笠家に関する資料を紹介しています。本119号及び次号の2回に分けて、武笠家に関する資料から第13代武笠家当主で、三室村村長となった武笠銀介（以降、銀介とする）とその父武笠祐左衛門（以降、祐左衛門とする）をめぐる波乱に満ちた人生についてたどりたいと考えます。

銀介は、嘉永6年(1853)7月18日、江戸駿河台にある旗本家小栗家の邸宅で出生しました。父は祐左衛門、母はタカです。祐左衛門の出身は下総国香取神宮周辺と思われてきましたが、これは銀介の祖父、武笠長左衛門のことでした。母は土屋村（現さいたま市西区）の出身で、名主永田庄左衛門の姉で、祐左衛門も実は母と同郷、土屋村出身であることが判明しました⁽¹⁾。祐左衛門は、小栗忠高、小栗忠順の二代にわたり用人として仕えています。銀介出生時の小栗家当主は新潟奉行の小栗忠高ですが、忠高は安政2年(1855)に急死、長男小栗忠順（以降、小栗とする）が家督を継ぎます。小栗上野介の官名の方が聞き馴染みがあるかもしれませんが。小栗家は、上野国、下野国、下総国と北関東の利根川流域周辺の村々、九ヶ村、約2500石⁽²⁾を知行していました。弘化4年(1847)の「九ヶ村割附控」(資料1 ^{さいたま市立博物館寄託・永田家文書})では、小栗家最大の知行地である高橋村（現栃木県佐野市）の御地頭所の宛先として「武笠祐左衛門」の名を確認することがで



資料1



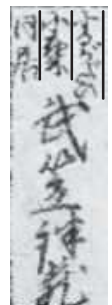
資料2

(後略)
此節魯亜船對州表工錠
泊いたし居候二付彼地見廻り
為御用豊後守様来ル十八日
乗気船二テ御出帆二相成申候
右二付武笠老人も御供被仰付
御跡より陸地二テ長崎表迄
相登り候趣尤五月出立二相成候

読み下し

きます。地頭には知行地の監督や年貢徴収の役割があります。文久元年(1861)、小栗が豊後守を名乗って外国奉行を務めていた頃、ロシア軍艦が対馬を占拠するポサドニック号事件が起きました。小栗は死をも覚悟して事態収拾のため蒸気船、咸臨丸で対馬へ急行しますが、武笠老人こと祐左衛門も随行する予定であったことが永田家私信（資料2 ^{さいたま市立博物館寄託・永田家文書}）から判明していま

す。群馬県重要文化財の小栗家家計簿（個人蔵）でも、安政6年（1859）12月27日、29日には「口入金返済利金共」の名目で金52両、51両、同年12月30日には60両と、祐左衛門に対しては、用人の中では特に多額の金銭が支払われていたことがわかっています。また、祐左衛門には、タカの前に先妻がおり、その先妻との間に、銀介にとって腹違いの兄となる武笠鍵蔵がいます。安政6年の「会計便覧」(資料3 ^{個人蔵})の中に、勘定奉行所付の四川用水方御普請役として武笠鍵蔵の名の上に、「するがだい 小栗 同居」と記されているのを確認することができ、小栗家知行地、主に渡良瀬川流域の普請などの役目を果たしています⁽³⁾。以上の事からも武笠家は公私両面で小栗家を支える重要な立場にあり、信頼の厚さを窺い知ることができます⁽⁴⁾。



資料3



(2) 小栗忠順家臣としての祐左衛門・銀介の動向

小栗忠順については、令和3年(2021)のNHK大河ドラマ「青天を衝け」の中で、勘定奉行として主人公渋沢栄一に米国から持ち帰ったネジを見せ、日本の行く末を熱く論じる幕臣として登場し、記憶に新しい方も多いことでしょう。

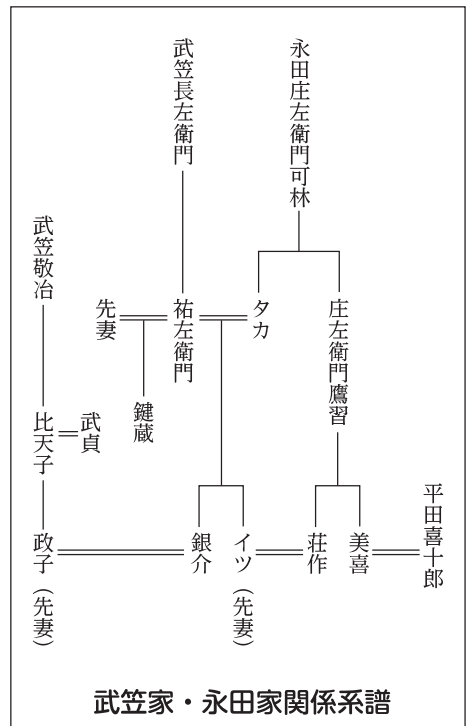
慶応4年(1868)1月12日、鳥羽伏見の戦いから江戸へ逃げ帰った將軍徳川慶喜は新政府への恭順を決断しており、徹底抗戦を訴え続けた小栗を退け、同年1月15日付で陸軍奉行並勘定奉行職の任を解きました。小栗家、また、武笠家ら家臣団にとっても運命的な転機ともなりました。

以降の出来事は、小栗自身が綴った群馬県重要文化財「小栗日誌」(個人蔵)をもとに追っていきます。1月19日、小栗は、祐左衛門に命じて小栗家の先祖が眠る大成村(現さいたま市大宮区)の普門院に家宝の槍⁽⁵⁾と具足、祠堂金50両を遣わせました。1月28日には、幕府に知行地の上州権田村(現群馬県高崎市)への土着願を提出し、翌29日に認められています。小栗は幕府側主戦論者の象徴でもあったため、新政府軍の中には彼に恨みを持つ者も多く、江戸に残るよりも知行地へ退いて恭順の意を示し平和に過ごすことこそ家族や家臣のためになると決断したのでしょう。2月28日早朝、小栗は、江戸駿河台屋敷に祐左衛門を留守居役として残し、母邦子、身重の妻道子、養嗣子の又一、その許嫁の鉞子らと家臣団総勢約30人を連れて権田村に向かいました。祐左衛門の代わりに、数え年16歳、元服したばかりの銀介が加わっています。

途中、一行は中山道大宮宿をはずれ、大成村、普門院を訪ね、小栗家中興の祖、小栗忠政が眠る墓を参詣しています。3月1日夜に一行は権田村の当面の宿所となる東善寺に到着しましたが、隣村の三ノ倉村には約二千人の世直し一揆が集結し小栗襲撃を企てていました。3月3日、小栗は家臣を遣わして、一揆の代表と交渉に当たりましたが、法外な金銭を要求されて止む無く決裂、深夜、防戦に備えて手筈を整えました。翌3月4日の朝、一揆軍が小栗の屯所へ迫りはじめると、銀介は権田村名主佐藤藤七と共に小栗の母や妻、婦人らを山間部に避難させています。その間、小栗は、又一や家臣と共に権田村内の獵師や強壯の者百人余りで約二十倍の敵を鎮圧してしまいます。3月25日、祐左衛門が小栗らを心配し権田村に訪れました。一揆鎮圧の件が江戸で取沙汰されていること、江戸に新政府軍が進軍し危険を察した武家や庶民が遠くへ退いていることなどの様子を伝え、翌日、江戸へ帰っています。

祐左衛門の杞憂は、一か月後、現実のものとなります。東山道総督府は、高崎藩、安中藩、吉井藩の三藩に対し、小栗が朝廷への謀反を企てているとして小栗追捕の命を出します。閏4月1日⁽⁶⁾、上の三藩から九名の藩士が小栗を訪れて、追捕の罪状を見せ小栗に真偽を問いただします。この時、小栗は造反の意思が無いことを理路整然と説き、さらに自身の潔白の証として、養嗣子の又一を高崎まで遣わすことを約束し藩士らを納得させました。高崎へは、又一と家臣三人、権田村奉公人三人、これに銀介も加わり同行したと伝わります。

三藩から報告を受けた東山道総督府は、小栗の陰謀は明白であり、直ちに誅殺すべしと再び三藩に出兵を迫り、監察使を任命の上、約千名の藩兵を従わせて権田村に向かわせました。5日、小栗は取り調べもないまま三人の家臣と捕縛され、6日、小栗主従四人は共に隣村の水沼村烏川河原で斬首されました。小栗の最期の言葉は、先に逃した母や妻ら婦女子の助命を求めるものだったと伝わります。小栗の母邦子、妻道子、養女鉞子らは権田村の人々に護衛され、新潟経由で会津まで逃亡しました。



又一及び家臣団三人は総督府の命により、翌日7日に斬首されました。奉公人三人とともに銀介らは釈放されています。なぜ処刑を免れたのかは、年少であったためとも考えられていますが諸説あり、詳らかではありません。東山道総督府が東善寺から押収した没収品取調書には「拵付刀 拾四本 外ニ壺本武笠銀之助分」⁽⁷⁾とあります。祐左衛門分だけ東善寺以外の別の場所、つまり、高崎で回収されたことを意味すると解釈される方もいます。

いずれにせよ、幕末という壮絶な時代を十代で経験した銀介自身が主人公となる人生はこれから始まろうとしていたのです。明治維新後の武笠祐左衛門・銀介のその後の動向については、次号以降で取り上げます。

(学芸員 磨田顕寛)

【脚注】

- 1 北川邦夫氏『祐左衛門・銀介親子の関係文書集』（2022 武笠家・駒崎家家族史研究会）によって、「銀之助日誌」（埼玉県立文書館寄託・武笠（寛）家文書）の中に武笠銀介の生い立ちが書かれており、祐左衛門の出生が土屋村であることが判明した。
- 2 小栗忠順が、万延元年(1861)、遣米使節団から帰国すると小林村、田部村、森村の3村 2000石を加増されている。
- 3 『浦和市史 2巻』401頁、『大宮市史通史編第3巻』228頁に拠れば見沼代用水や高沼用水など用水の差配や普請にも当たっている。
- 4 小栗忠順直筆の書簡について、拙稿「小栗忠順関係資料調査報告」『さいたま市立博物館調査レポート』17頁以降を参照されたい。
- 5 小栗忠政は徳川家康の三河以来の譜代であり一番槍の戦果を果たし、徳川家康から「又もや一番槍」から「又一」の名と信国の槍を拝領した。その故事に由来して、小栗家の嫡子は代々又一の名を名乗り、小栗忠順も当主となるまで又一を名乗った。
- 6 慶応4年は、閏月があるため4月が2回ある。太陰暦では3年に1回程度、閏月を加え1年13ヶ月として、暦と季節のずれを解消した。
- 7 『安中市史 第五巻 近世資料編』1027頁

日誌抄

令和3年

7月1日 リニューアルオープンコンサート「バイオリンとキーボードの二重奏」

7月2日～4日 リニューアルオープン記念講演「さいたまの宿場」

7月20日～28日 学芸員実習

7月24日・25日・31日・8月1日 まが玉づくり

10月26～28日 リニューアル記念講演会

「さいたまの宿場」

11月9日 春日部市立桜川小学校体験学習

11月13日・14日 見沼通船堀仕組み実験

11月19日 川口市立東領家小学校体験学習

11月28日 SDGs 13親子探鳥会

12月7日～1月10日 渋沢栄一書「恭慶館」特別公開

12月22日～2月27日 「ちょっと昔の暮らし展」

7月27日・28日、8月3日・4日、9月4日・5日、

10月9日・10日・24日、11月20日・21日、

12月4日・5日、令和4年1月15日・16日、2月19日・20日、

3月5日・6日 「うらはく工芸くらぶ」



リニューアルオープンコンサートの様子

さいたま市立浦和博物館館報 **あかんさず** No. 119

編集・発行 さいたま市立浦和博物館

〒336-0911 さいたま市緑区三室 2458 TEL・FAX 048-874-3960

発行日 令和4年3月25日

ホームページ <https://www.city.saitama.jp/004/005/004/005/002/index.html>

E-mail urawa-museum@city.saitama.lg.jp



この館報は2,000部作成し、一部当たりの印刷経費は24円です。

